

第10回浜松国際ピアノコンクール開催記念イベント
イリヤ・ラシュコフスキー ピアノリサイタル

1部

「巡礼の年 第1年 スイス」より 第8番 “郷愁”

…………… リスト

ソナタ ロ短調 …………… リスト

2部

バラード 第1番 Op.23 ト短調 …………… ショパン

ソナタ 第2番 Op.35 変ロ短調 …………… ショパン

バラード 第4番 Op.52 ヘ短調 …………… ショパン

秋

2017
四季のコンサート

2017年10月13日(金) 18:00開場 18:45開演

会場:アクトシティ浜松中ホール

主催:浜松音楽友の会

プロフィール

1984年シベリアのイルクーツク生まれ。5歳よりピアノを始め、8歳でイルクーツク室内オーケストラと共演。1993年シベリア・ノボシビルスク特別音楽学校に入学し、レベンセン教授に師事。1995年イタリア・マルサラ市の国際コンクールで優勝。1998年ウラジミール・クライネフ国際コンクールで優勝し、本格的な演奏活動を展開。同年、ロストロポーヴィチ財団の奨学金を授与される。2000年ドイツ・ハノーファー音楽学校に入学、ウラジミール・クライネフ氏に師事。その後、パリのエコール・ノルマル音楽院にてMリビツキ教授に師事。

2001年ロン＝ティボー国際音楽コンクールのピアノ部門で第2位に輝く。2005年アシュケナージが審査員長を務める香港国際ピアノコンクールで優勝。2007年エリザベート王妃国際音楽コンクールで4位。2011年ルービンシュタイン国際ピアノコンクール3位。2012年伊・ピネロロ市国際ピアノコンクール優勝。日本へは2002年に初来日し、サントリーホールで行われた「ロン＝ティボー国際音楽コンクール ガラ・コンサート」に出演。ショパンの協奏曲とソナタ、プロコフィエフのソナタを見事に弾き切り、聴衆を圧倒した。以降も来日公演を続ける中、2012年11月第8回浜松国際ピアノコンクールにて見事優勝を果たし、聴衆賞、札幌市長賞も受賞。翌年2013年には優勝者記念コンサートツアーが国内外25公演にわたり開催された。

CDは2008年にナクソスより「チャイコフスキー／四季、ピアノ・ソナタ」、2013年に第8回浜松国際ピアノコンクールのライブ盤（他入賞者の演奏含む）、また同年10月に「ショパン／練習曲集全曲」がビクターより発売。最新アルバムは日本アコースティックレコーズより2016年3月「スクリャービン／ピアノ・ソナタ全集」がリリースされた。

第10回浜松国際ピアノコンクール開催記念イベント

イリヤ・ラシュコフスキー
ピアノリサイタル



ILYA RASHKOVSKIY
PIANO RECITAL

●リスト (1810~1886) / 「巡礼の年 第1年 スイス」より 第8番 “郷愁”

1833年、フランツ・リストはマリー・ダグー伯爵夫人と愛し合うようになり、ついにはジュネーヴで2人の生活を始めた。この頃リストはしばしばアルプス地方に出かけ、その印象を19曲からなる「旅人のアルバム」に纏めたが、それまで演奏活動に忙殺されていたリストにとって、自己の芸術を省み、向上させるまたとない機会でもあった。この19曲をもとに9曲に改作されたものが、ピアノ曲集《巡礼の年 第1年》である。9曲中、もっとも著名な「オーベルマンの谷」は、仏文学者セナンクールによる小説「オーベルマン」の主人公の心情を音楽に映したものであるが、この「郷愁」にはオーベルマンが友人に綴った「自分の唯一の死に場所はアルプス」という望郷の想いが込められている。

●リスト / ソナタ 短調

19世紀中頃、最大のピアニストとして活躍していたリストは、その華麗なるピアニズムを盛り込んだ技術的にも非常に難度が高いピアノ曲を多く作曲したが、ソナタとして残したのは1曲のみである。それも単一楽章という甚だ珍しい形で書かれており、ソナタ形式と多楽章形式を同時に取り込んで融合させた、リストならではの創意に溢れている。1852年から翌年にかけて書かれ、1854年に出版された。

さらに当時ヨーロッパを席卷し始めたロマン主義に呼応し、和声や形式、標題音楽に至る新しい方向性を模索していたリストにとっても、まさにこのソナタは劇的かつ思索性に富んだ独創的でドラマティックな傑作となったのである。様々な主題を変容させながら循環させ、起伏を自在にコントロールしながら綿密に積み上げていくというストーリー性は、演奏者にも技巧ばかりでなく、奥深い譜読みや高い見識が求められる。このソナタは3つないし4つの部分から構成されるが、連続して演奏するように指定されているため、全体でひとつのソナタ形式をなしていると考えることができる。そのため、シューベルト「さすらい人幻想曲」等から影響を受けているという指摘もある。「幻想曲」の返礼として、シューマンに献呈された。

●ショパン (1810~1849) / バラード 第1番 Op.23 ト短調

フレデリック・ショパンは4曲のバラードを遺した。練習曲集等と並びショパン音楽の最高峰といわれるこの4曲は、ショパンが21歳から32歳の最も充実していた時期に書かれている。バラードとは中世の声楽作品であり、豎琴を携えた吟遊詩人が伝える物語でもあった。ショパンはスケルツォや夜想曲などと同様、バラードにおいてもその様式やテイストをピアノ音楽に採り入れ、比類ない芸術的高みへと結実させたのである。またバラードには、ポーランドの詩人ミツキエヴィチからの影響も指摘されているが、単にそのテキストを用いたのではなく、あくまで靈感を得た色調や表徴をショパンは表現したのである。ゆったりと重々しいラルゴの序奏の後、揺蕩うように第1主題が登場、物語の幕を開ける。主題は徐々に動きを加えて頂点へ、それが衰えると静謐な第2主題に移って優雅な味わいを感じさせる。1831年のウィーンから35年のパリにかけて作られ、シュトックハウゼン男爵に献呈された。

●ショパン / ソナタ 第2番 Op.35 変ロ短調

ショパンがジョルジュ・サンドとマヨルカ島への旅行から帰った翌年6月、ショパンはサンドの家のあるノアンを初めて訪れた。ノアンはパリから南に300キロほどの村である。そのポーランドの田園にも似た美しい風景の中で、ショパンは生気を取り戻し、著しく旺盛な創作意欲を掻き立てられたのである。それによって健康も回復、心身ともに充実した時期を迎えたショパンは、本作を初め「即興曲 第2番」、「ノクターン ト長調」、「スケルツォ 第3番」、そして幾つかの「マズルカ」など数多くの傑作を生み出した。ただ第3楽章「葬送行進曲」については、友人のフォンタナに宛てた書簡により、既に1837年頃書き上げられたと推定されている。それまでの伝統的様式を覆す画期的なソナタであり、1840年5月に出版された。

第1楽章は苦悩するグラーヴェで開始され、第1主題が激しさを増しながら進行すると、やがて平穏な第2主題が導き出され、次第に盛り上がり熱狂の内に楽章を閉じる。第2楽章はスケルツォ、疾走するような和音とオクターヴとが、複雑なリズムとハーモニーを繰り広げる。第3楽章は沈痛きわまりない弔鐘が執拗に鳴り響く葬送行進曲であるが、続く第4楽章は非旋律的な、すべてユニゾンで構成された特異な楽章である。

●ショパン / バラード 第4番 Op.52 ヘ短調

独創性に溢れた傑作である。序奏に続いて悲しみを背負った第1主題が現れる。変奏を繰り返しながら変ロ長調の第2主題に引き継がれるが、これはコラル風趣がある。再現部を経て自由な曲想に変わり、そして大きく盛り上がりながらクライマックスを迎えるが、突入する直前の一瞬の静寂、続く狂乱のコーダの風趣はショパンの天性の表徴であり、この曲がショパン最高傑作のひとつであることに疑いはない。1842年に作曲され、シャルロット・ド・ロスチャイルド男爵夫人に献呈された。

アンコール曲

1. ドビュッシー / 前奏曲第2巻より第12曲「花火(Feux d'artifice)」

2. ショパン / ノクターン 嬰ハ短調 遺作「レント・コン・グラン・エスプレッシオーネ」

まじまじうたい(音楽評論家)